

シャロームへの格闘―聖書に聴く『平和』

左 近 豊

はじめに

本日は、ご一緒に平和を求め、祈る機会を与えられ、感謝しています。平和を祈るという当たり前にも思えることが、大変な葛藤を伴うものだ、ということ痛いほど突きつけられていることと思います。聖書の舞台であるイスラエル、そしてパレスチナで10月以来の激しい殺戮によって憎しみの炎に油注がれ、数万人の命が奪われていることを日々耳にしています。またウクライナで起きている理不尽な戦争が間もなく2年になろうとしています。ただ、ロシア軍がウクライナに攻撃を始めた時の衝撃、ハマスがイスラエルに攻め込んで殺戮と誘拐をし、イスラエル軍が病院までもターゲットに空爆を行った激しいショックが、日が経つにつれて薄らいでゆき、異常なことが日常となつてゆくにつれて、痛みや衝撃に麻痺してゆくのも悲しい現実となっているように思います。

聖書は熱い書物です。「神の言葉は生きていて、力があり、いかなる両刃の剣より鋭く、魂と霊、関節と骨髓とを切り離すまでに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができます」(ヘブライ4:12 以下引用は『聖書協会共同訳』)。今日は、今の時代に目覚めて醒めた眼差しをもって、私たちが聖書から与えられている「平和・シャローム」のヴィジョンを確認し、その平和が完成するまで、弛まぬ祈りの格闘に召されていることを、互いに励ましあう時となればと願います。

シビアな現実を冷静に見据えながらも、その現実には埋没しない、かといって理想を夢見るばかりで現実から遊離しない、浮世に溺れず、しかも浮世離れない聖書の民の「蛇のように賢く、鳩のように無垢」(マタイ10:16)な生き方を、祈りつつ確かめてまいりましょう。

1. 聖書の「シャローム」、私たちの「平和」

1) 物語間の相克に見る「平和」(W.ブルッゲマンとの対話)

2023年3月半ばに、アメリカ・ミシガン州に私の恩師W.ブルッゲマン先生を訪ねました。青山学院大学の総合研究所で何人かの同僚たちと取り組んでいるテーマ「聖書における和解の思想」の研究のためです。聖書の「平和」とは、神と人との和解、そして人と人の和解によって完成することをパウロがロマ書やエフェソ書で述べています¹。聖書の描く「平和」と「和解」には密接な関連があることを踏まえて、ブルッゲマン教授とテーブルを囲んで対話をしてきました。

W.ブルッゲマン教授は、これまでに100冊を超える書物を出版しておられて、創世記、出エジプト記、申命記、サムエル記、列王記、イザヤ書、エレミヤ書、詩編などの注解書、数えきれない論文やエッセーを出されて

1 「このように、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ています。」(ロマ5:1)

「キリストは、私たちの平和であり、二つのものを一つにし、ご自分の肉によって敵意という隔ての壁を取り壊し、数々の規則から成る戒めの律法を無効とされました。こうしてキリストは、ご自分において二つのものを一人の新しい人に造り変えて、平和をもたらしてくださいました。十字架を通して二つのものを一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼしてくださったのです。キリストは来られ、遠く離れているあなたがたにも、また近くにいる人々にも、平和の福音を告知らせてくださいました。」(エフェソ2:14-17)

この研究プロジェクトに協力してくださった関西学院大学の浅野淳博先生が『福音と世界』8月号の特集「戦争の時代に平和を問う」の中で「積極的な平和創出の聖書的根拠」という論考を出され、和解と平和の聖書学的考察をされている。

90歳になられた今も著作を出し続けている方で、つい先日もキリスト教教育と旧約聖書の関連を著した『人を育むことば 教育モデルとしての旧約聖書』（宮本あかり訳、日本基督教団出版、2023年）が翻訳出版されたばかりです²。現代を代表する聖書学者の一人と言って過言ではないでしょう。今はのどかで静かな、果樹園やワイナリーに囲まれたミシガン湖畔に引退されてご夫妻で穏やかな日々を過ごしておられます。

まずお聞きしたのは、次のような内容でした。

「現代の国際情勢、分断と紛争が国内外に深まっている中で、聖書の語る「和解」はどのように成し遂げられるのでしょうか？ 特に対立する双方の背後に「神話」的な物語があって、それぞれの相いれない物語をもって、互いに反目しあう場合、「和解」は可能でしょうか？ 例えばロシアのプーチン大統領は「キエフルーシ（キエフ大公国）」や「ルースキーミール（ロシア世界）」といったイデオロギー神話（物語）を国家の物語として侵略を正当化しており、西欧は、所謂“リベラル民主主義的”物語を掲げて対抗しています。それぞれに異なる物語の対立が戦争を引き起こし、多くの命が犠牲となっているとも言えます。

それぞれの文化にはそれぞれの物語がある。このような相反する象徴的（シンボリック）な物語間で「和解」はどのように可能となるのでしょうか？」

この問いに対してブルッゲマン先生は、旧約聖書の内部に見られる物語と物語の対立を引き合いにして答えられました。

2 邦訳されているものは、この他に『現代聖書注解 創世記』（向井孝史訳、1986年）、『古代イスラエルの礼拝』（大串肇訳、2008年）、『聖書は語りかける』（左近豊訳、2011年）、『預言者の想像力』（鎌野直人訳、2014年）、『叫び声は神に届いた—旧約聖書の12人の祈り』（福岡裕子訳、2014年）、『現代聖書注解 サムエル記上』（中村信博訳、2015年）『現代聖書注解 サムエル記 下』（矢田洋子訳、2014年）、『旧約聖書神学用語辞典 響きあう信仰』（小友聡・左近豊監訳、2015年）『詩編を祈る』（吉村和雄訳、2015年）、『平和とは何か—聖書と教会のヴィジョン』（小友聡・宮崎薫訳、2018年）などがある。

「両者がまずそれぞれの核心的神話（Core Myth）を再考しようという意志を持ち、別の核心的神話との折り合いをつける努力しなければならないと考えます。それは、どちらもが自分の核心的神話を絶対的なものと主張せず、また一切関係を断つということをしないということです。

ご存知のように旧約聖書には**モーセ契約**という核心的神話があり、**ダビデ王権物語**という別の核心的神話があります。これらは意図的に（旧約聖書内に）併存させられていて、**旧約聖書は、このモーセ物語とダビデ・ソロモン物語の終わることなき折衝（negotiating）関係の中に置かれている**といつて良いでしょう。ただしモーセの核心神話は、より流動的で柔軟であり、私が思うに、新しく生起する事柄や新しい展開というものに対して、より広く開かれていると言えます。」

旧約聖書は、対立する思想や物語が、「終わることなき折衝」を重ねながら共存する、非常にダイナミックで流動的な「平和」のモデルとなる、ということを教えられました。聖書が描く「平和」は、新しく起こってくる出来事や、これまでに想定しなかった新しい展開に、広く開かれ、柔軟にこれらと向き合い、忍耐強く言葉をもって対話をし続ける状態であることを示されました。

「平和」は、決して仲間内で慣れ親しんだ「内輪」の物語や神話だけに固執し、浸って閉じこもって保たれるものではない。ましてや異なる物語に籠る相手を力でねじ伏せて殲滅することさえ厭わないような、**力による均衡で保たれるものではない**。むしろ生きて働かれる神様が、この時代に向けて語り掛けられる言葉に耳を澄まし、深い淵に沈む者の闇を見つめる眼差しを磨き、滅びゆく絶望に希望を届ける魂を呼び覚ます、**動的平和**を語っていることに思いを至したのです。

聖書の「平和」は、ただ「戦争がない状態」ということではなくて、より広く、また深く、社会全体において一人ひとりの命と尊厳が守られ、充実した命の営みがなされる状態だと言えます³。

3 大島力先生が、『信徒の友』2023年8月号「特集 平和をつくり出す・聖書が語るシャロームにどう聴くか」（16～19頁）で書かれているように「シャローム（ヘブライ語で「平

2) 平和観の相克（ガルトウングの「積極的平和」と「消極的平和」）

このような聖書の「平和」観について、平和学という分野の第一人者で日本にも来られたことのあるノルウェーの社会学者ヨハン・ガルトウングという先生の種類を参考してみたいと思います。「戦争がない状態」、とにかく殺し合いが起これないよう、例えば武力を増強して、他国の侵略を未然に防ぎ、力で力を制する、極端な場合は、核兵器をちらつかせて、相手の攻撃の機先を制する脅しと恐怖で戦いを抑止することで保たれる、戦いのない、という意味の「平和」が一方にあります。

長崎や広島の実爆の惨劇を引き起こさないためには、核兵器を一切なくす、廃絶するのではなくて、むしろこれを利用して、核攻撃後の壊滅を脅しに、綱渡りの均衡をぎりぎりで見守る、**直接的暴力**がない状態を維持する。これをガルトウングは「消極的平和」と名付けます⁴。

他方「積極的平和」と呼ぶ平和にガルトウングは言及します。たとえ戦争がなかったとしても、生活している社会や国の中に、貧困や差別、不正や人権侵害のような「**構造的暴力**」が、人に対して影響力をもって行使される状態ならば、それは暴力が存在していると捉える。そのような「構造的暴力」まで含めてあらゆる暴力が無くなった状態を「積極的平和」と定義しています。聖書のシャロームと重なる部分があると言えます。

ここまでお聴きになられて、なんとなく「消極的平和」と「積極的平和」の

和」の意)の表す平和は単に『戦争が行われていない状態』のみをしめすものではありません。……かなり広い意味があります。戦争が『死の文化』の象徴であり現実でもあるとするならば、シャロームは『いのちの文化』の象徴であり私たち人間が生きる意味を感じ、充実した人生と社会生活を営むことを意味しています」(17頁)。

4 ノルウェーの平和学者、ヨハン・ガルトウング氏の用語を参照（『構造的暴力と平和』(高柳先男、塩屋保、酒井由美子訳。中央大学出版部、1991年)。ガルトウング氏によれば、たとえ戦争がなくても、貧困や差別、不正や人権侵害のような「構造的暴力」が、人に対して影響力をもって行使される状態には暴力が存在していると捉える。そのような「構造的暴力」がない状態を「積極的平和」、直接的暴力がない状態を「消極的平和」と定義している。

定義が逆ではないか、と感じられる方もおられるのではないのでしょうか。数年前から頻繁に「積極的平和主義」という言葉が全く逆の意味で日本では使われてきたからです。今でも内閣官房の広報に載っていますが、わが国の安全保障の基本理念として、同盟国と連携をして、未然に攻撃や侵略を防ぐことで「国民の生命を守りつつ、世界の平和と安定のために積極的に取り組むこと」が「積極的平和主義」と謳われています。武力をもって同盟国と集団的に安全を保障する枠組みを積極果敢に推し進めることが「積極的平和」なのだ、と。核兵器を持つ近隣諸国からの侵略に備えて、抑止力としての核の傘を差し掛けられることに甘んじてばかりいるのではなく、差し掛けられた傘にわが手をしっかりと添えて、応分の負担と犠牲を厭わずに「普通の国」となって支えあおう、という姿勢が積極的平和の定義として日本では定着しています。防衛費GDP比2%への増額、安保関連3文書の閣議決定、防衛装備品輸出ルールの見直しによる武器輸出の解禁など、“積極的”に矢継ぎ早に政策が繰り出されてきました。それとは裏腹に、人権侵害や性暴力、不正やヘイトクライム、ジェンダー差別やジェンダーギャップ⁵、などの「構造的暴力」に相変わず深く広く社会は蝕まれています⁶。

5 2023年6月21日に世界経済フォーラム（WEF）が、男女格差の現状を各国のデータを元に評価したGlobal Gender Gap Report（世界男女格差報告書）2023年版では、日本のジェンダーギャップ指数は146か国中125位で過去最低となった。特に政治が世界最低クラスの138位であった。健康と教育の分野では良い指数であるが、政治と経済分野において非常に偏った状態が指摘された。

6 積極的平和と消極的平和という言い方だと、積極的はプラスイメージ、消極的はマイナスイメージで、消極的はダメだと考えがちだが、どちらの平和が正しいか、間違っているか、いいかダメかということではなく、あるいは、現実的か理想論か、あれかこれか、白か黒か、どちらかが絶対、という対立ではなく、互いに論破して排除しあって壁の内に籠って攻撃しあうのでもなく、世界を管理する責任を託された「人間」として、よりよい社会、よりよい世界の実現にむけて倦まずたゆまず、忍耐と品格と希望をもって、託されたこの時代を歩むことが私たちに委ねられていると言えよう。旧約聖書がそうであるように、終わりのなき折衝、対話の関係の中で、真実を謙虚に探究することが求められていると言えるだろう。モーセ的核心神話がそうであるように、より流動的で柔軟で、新しく生起する事柄や新しい展開というものに対してより広く開かれて、「最後から一歩手前の

改めて「積極的平和」と「消極的平和」は、それぞれに見ている景色が違だけでなく、その基となる物語が違うのだと言えるかもしれません。私たちは、平和を巡る物語の相克、葛藤に直面しているのだと思います。先ほどのブルグeman先生との対話の中でもクローズアップされたことですが、対立する思想や物語が、終わることなき格闘と折衝を重ねながら対峙をし、対話する、非常に動的でダイナミックで流動的な「平和」モデルを旧約聖書に見ることは、今を生きる私たちにとって一つの大事な指針になるように思うのです。

3) 「積極的平和」の物語（中村哲氏、内村鑑三）

ガルトウングのいう「積極的平和」の物語を示す具体例として、思い浮かべられるのは、4年前の12月に銃撃されて命を奪われた中村哲さんがアフガニスタンでされた働きではないでしょうか。中村さんがイメージし、原点とし、仰ぎ見ていた「平和」は、おそらくこの「積極的平和」であったと言えるでしょう。中村哲さんは、西南学院中学に通っておられたころ、聖書を出会い、近くのバプテスト教会（香住ヶ丘バプテスト教会）に通うようになり、洗礼を受けてキリスト教の信仰を持ちました。九州大の医学部を出て、日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）から派遣されて、パキスタンで医療支援に取り組む中で、しだいに、戦乱絶えない隣国アフガニスタンを生涯の働き場として命を捧げるようになっていった。「構造的暴力」と向き合いながら、その解決に乗り出した。アフガニスタンの人たちが干ばつや水の慢性的な不足から貧困にあえいで、農地もなく職もなく、生きるためには兵士にならざるを得ない。部族間の争いや侵略してきた旧ソ連との闘い、さらには2001年の同時多発テロの報復（アルカイダのビンラディン殺害、ザワヒリ暗殺）で攻め込んできたアメリカ軍との戦闘に巻き込まれ、兵士になるしか生きていく道がなかった人たち、その家族の悲惨を目の当たりにして、中村医師は「清潔な水があれば人々が健康

真剣さ」をもって執り成しの働きをすることが求められていると言えよう。私たちは神ではない。究極的な真理は神様のものである。私たちの物語のみが真実かどうかは分からないのだ。最後の一步は、私たちの信念で埋めてはならない神様の領域だから。

になり、故郷の農村に帰って平和に暮らせる」と考える。考えるだけではなく、中村さんは、自ら土木工学を独学で学んで図面を描き、重機を自ら操縦して、乾涸びた大地に、日本の古くからの灌漑の技術を用いて、全長27キロに及ぶ運河を引く。さらに将来、壊れても現地の資材と人で修復できる持続可能な灌漑用水路作り、砂漠に緑の大地を創り出すことになる。15万人が農業で生きていけるようになる。肥沃な農地ができればゴーストタウンに農産物を売り買いする市場（いちば）が開き、市場に人が集まれば街ができる。結果として65万人もの人の生活を支えることになった。緑に覆われた大地に子どもの遊ぶ声や、働く大人の掛け声、鳥のさえずりも響く。銃を取って血を流して命のやり取りをするのではなく、鍬を奮って汗を流して育てた産物をやり取りしながら命豊かに生きてゆく社会を目指し、実現した。恐怖と抑止力で保たれる平和とは違う、もう一つの動的な平和な状態（積極的平和）を想像し行動したと言えるでしょう⁷。

この中村さんが愛読し、他の人にも読むことを勧めていたのが内村鑑三『後世への最大遺物』だったと言われています⁸。中村さんの平和の物語の核に内村鑑三の思想があった。この本の著者で、明治期のキリスト教思想家であった内村は、こんなことを書いているのです。

「(大事なのは) この世の中はけっして悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であるということを信ずることである。失望の世の中でなくして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中にあらずして、歓喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去ると

7 朝日新聞のテヘラン特派員の佐藤達弥氏が2023年9月12日の朝刊の国際面で「中村哲さんがくれたもの」と題して書いておられた中で引用されたアフガン難民の男の言葉「**外国人は外貨と銃を持ち込んだ。中村さんはパンと真心を持ってきてくれた**」

8 内村鑑三著『後世への最大遺物・デンマルク国の話』（岩波書店、2011年）

いうことであります」⁹

争いが絶えず、憎しみが暴発する、悪魔が跋扈しているとしか思えないような世界、聖書の舞台で、「**幼子や乳飲み子は町の広場で弱りはてている。……母の懷で息絶えて行く**」(哀歌2：11-12)。核の使用や原子力発電所への攻撃を脅しにして恐怖を弄ぶリーダーたちの不遜で獰猛で、人の尊厳や理性をあざ笑う本能的な言葉が飛び交い、失望すること余りに多い中、悲しみが押し寄せてくる世の中、鉄の雨と爆弾の嵐が降り注ぐ中で、なお、信じる。ここは神が支配される世の中、災いが覆い尽くす世ではなくて、希望の世の中、干上がった嘆きの先にこそ開かれる収穫の喜びの世の中である、と確信しながら、考える。考えて次の一步を踏み出す。そういう物語を与えられていることに中村医師と内村鑑三、そして讃美歌21-361番「この世はみな神の世界 悪魔の力が世に満ちても わが心に迷いはなし 主こそがこの世を治められる」は気づかせてくれるのです。

2. 聖書のシャローム

災いの計画ではなく、希望を与える平和の計画を立てておられる聖書の神を信じ、仰ぎ見て生きる。そうやって、たった一度の人生を、後の世の人たちへの贈り物とするような生き方があることを、内村鑑三は聖書から、中村哲さんは内村鑑三からインスパイアされたのです。平和への一步は、私たちがどのような「平和」をイメージするかから始まることを教えられます。積極的平和の物語は、柔軟で対話的で、新しい展開へと開かれているものです。その原点である聖書のシャロームに思いを寄せてまいります。

1) 聖書の民におけるシャローム

旧約聖書が厳しい現実の中で、常にイメージしていた平和のヴィジョンがイ

9 前掲書、54頁。

ザヤ書に出てきます。

「狼は小羊と共に宿り豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ その子らは共に伏
し獅子も牛もひとしく干し草を食らう。

乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ 幼子は蝮の巣に手を入れる。

わたしの聖なる山においては 何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。

水が海を覆っているように 大地は主を知る知識で満たされる」

(イザヤ11：6-9)

「(戦いのための) 剣 (つるぎ) を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に
向かって剣を上げず、もはや戦いを学ぶことはない。さあ、主の光の中を
歩もう」(イザヤ2：4)

この世はみな神の世界、ここも神が支配される世の中、悪の力が世に満ちて
も、決して災いが覆い尽くす世ではなくて、希望の世の中、干上がった嘆きの
先にこそ開かれる収穫の喜びの世の中を求めて、「主の光の中」を踏み出す一
歩があることをイザヤは告げています。

聖書の平和の物語は、構造的暴力のない世界を望み見る、しかも終わりの日
には完成する神の支配の下にある世界をイザヤの預言を通して展望する。た
だし、これは、決して放っておいても自然発生的に生じるものではない、人に本
能的に備わっているものでもないのかもしれない。

この精神に生きる方々との触れ合い、出会い、そして人格的な交わりを通し
て、時に無意識、時に意志を伴いながら尊い価値観を確認しながら噛みしめな
がら、内側に刻み続けることで維持され、継承され、発展して行くものだと思
うのです。

近年の「ポスト真実」やフェイクニュース蔓延る世界にあっては、洋の東西
南北を問わず、本能や欲望に訴えて人を引きつけ、未成熟な自己愛に浸って身
内で固めた偏狭な愛に身を任せてしまう傾向がそこかしこに見られるばかり
か、勢力を拡大しています。その中にあって、聖書を規範とする教会は、知性
と理性と信仰に基を据えて、動物的本能に抗って、人間であること、なにより

も「神のかたち」として創造された人として、日々陶冶されてゆく、練り清められ、他にはない「地の塩」の味をまとうということが、本当に求められていると思うのです。

本能をむき出しにして腕力で事を決して行くことこそリアルと捉える風潮の中にあって、あるいは世間に飛び交う荒ぶる言葉や銃弾、ミサイル攻撃の脅威に曝されながら、なお聖書の仰ぎ見る「シャローム（平和）」を想像しつづける（個人のみならず共同体も）ことは、今に限ったことではないことを聖書は教えてくれます。聖書の歴史を貫いて、荒ぶる物語のただ中での引き裂かれんばかりの葛藤と激しい格闘を経て、聖書のシャロームは受け継がれ、語り継がれ、魂の礎とされて今に至っています。私たちはそういう聖書の民の信仰に連なっています。主イエスは、慰めと励ましをもって言われました。「これらのことを話したのは、あなたがたが私によって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」（ヨハネ16：33）

2) 礼拝におけるシャローム

すでに世に勝っておられる主イエスに励まされながら、聖書のシャロームを望み見る信仰共同体の源泉について、興味深い例をご紹介します。先に紹介したブルッゲマンが『預言者の想像力』¹⁰の中で、W.キャヴァノー著『拷問と聖餐—神学、政治、そしてキリストのからだ』に言及しています。50年前（1973年9月）、南米チリで軍事クーデターによって政権を握ったピノチェトが、独裁政権に批判的な人たちをまとめて競技場で殺戮し、数千人を一晩で殺し、その後20年近くに亘って公然と拷問・弾圧・暗殺によって、異議を唱える文化人や政治家、一般の人たちの想像力や発言を封じていった。チリのキリスト教会は当初はなすすべもなく受け身で黙認を貫いたが、ある時点から教会指導者たちは、2000年間守り続けてきた礼拝、とくに聖餐式を核とする共

10 W.ブルッゲマン著、鎌野直人訳『預言者の想像力』（日本基督教団出版局、2014年）

同体が、恐怖による支配に抵抗する力の後ろ盾となり、原動力となることに気づき始めたという。聖書の語る救いと平和の物語をもって戦車と対峙したり、想像力をもってヘリコプターと対峙できるはずがないと誰もが思っていた。戦いを幻想対現実という見方でしか捉えられなかったから。けれども、それだけがものの見方ではなくて、実は、二種類の想像力、つまり弾圧をする軍隊や政権の抱く想像力と、彼らに反対する者たちの想像力の争いなのだ、ということ を正しく認識するに至った、と。軍事政権の国家観や国民像、あるいは神話や物語に根差した想像力が軍政下の過酷な現実を創り出しコントロールしている。けれども教会、そして聖書に根差した想像力が次第にその現実には効果を発揮していった、と。聖餐はクリスチャンが拷問に抵抗する鍵であり、聖餐に共に与り続けることは、神の想像力の中に住まうこと。「**ご自分の肉によって敵意という隔ての壁を取り壊し、…ご自分において2つのものを一人の人に造り変えて、平和をもたらされた**」(エフェソ2・14-15) 十字架と復活の主の晩餐に与って、キリストのまことのからだの業に、からだも魂も組み入れられることによって、人々は、拷問という暴力的手段で現実を定義しようとする独裁権力の力に抵抗し、ついにピノチェトの恐怖支配から抜け出していった、ということです。

今日、私たちも何を想像できるかが問われている、と言えるでしょう。抑止力と軍事的脅威の増強による力の均衡という消極的な「平和」の物語がますます説得力を増すかに思える中でこそ、聖書の描く積極的な「シャローム」を想像する共同体の物語を、教会は命の言葉として持っていることを大事にしたいのです。教会は、宝を盛った土の器であり、世の光であることの証なのです。浮世に溺れず、しかも浮世離れすることなく、今という時代にあって「平和を造りだすもの」、「地の塩、世の光」とされている。眼前に迫る脅威や危機を冷静に見極め、主にある究極的な「平和」への真摯な備えをなす、陶醉しない醒めた眼差しをもって今を責任的に生きる礎を聖書に持っていることの幸いと責任を噛みしめたいと思います。

3) 救いの歴史におけるシャローム

聖書に根差した「シャローム」とは、どのようなものかを、旧約聖書の言葉を通して考えてみたいと思います¹¹。

詩編85編には、聖書の「シャローム」観が凝縮されています。「慈しみとまことは出会い、義と平和が口づけする。まことは地から芽生え、義は天から目を注ぐ」(11-12節)。

旧約聖書の重要概念「慈しみ」「まこと」「義」が「平和」と密接に結びつけられていることがわかります。「慈しみ」「まこと」「義」は旧約では神様の属性を言い表すときにも使われていますので、「平和 (シャローム)」は神様の特質とも重なると言えるでしょう。

ここで詩編の文脈を注意深く見てまいりますと、11節～12節の言葉に先立つ、この詩の前半部には、危機に瀕した厳しい現実認識に直面した嘆きが吐露されている、ということに気づかされます。けっして夢見心地で現実逃避してユートピアを妄想しているのではないのです。取り巻く環境が激変し、昨日まで当たり前だった日常が崩れ去り、これまでの価値観も倫理も信仰さえも揺さぶられる状況の中で示されるのが聖書の「シャローム」であることが明らかになるのです。それは預言書においても同様です。完膚なきまでの敗北と捕囚という喪失と挫折のただ中でエレミヤは神による「平和の計画」を告げます(エレミヤ29章)。ほぼ同時期にエゼキエルも、屈従と略奪と搾取と脅威のただ中で「平和の契約」を語るのです(エゼキエル34章)。ここからわかるのは、聖書におけるシャロームは、破れ崩壊した「過去」に蝕まれて混沌とした「現在」の世界に示される、神の創造される「将来」の新しいヴィジョンだということです。

11 「正義が造り出すものは平和。／正義が生み出すものは／とこしえに至る静けさと信頼である。」(イザヤ32:17)

「私の戒めに耳を傾けさえすれば／あなたの平和は川のようになり／あなたの正義は海の波のようになるであらうに」(イザヤ48:18)なども参照。

3. シャロームを創り出す共同体

ここからは、平和を「創造」「創り出す」共同体、ということについて考えてみたいと思います。

1) 平和を造り出す

主イエスは「平和を造る人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」と言われました。旧約聖書でもシャロームは自然発生的に出現するものではなく、神の賜るシャロームを示された共同体が、祈りと意志を持ってみ業に参与することで造り出されるものと考えられています。選び、愛し、ご自分の民とされた神の救いに応答する中にシャロームは造り出される、と。エジプトの奴隷から救い出された共同体の新しいあり方を示す「契約の書」(出エジプト 20：22～23：33) には、敵を愛し、憎むものと協働することで、敵意の連鎖を断ち切ることを教える言葉があります（出エジプト 23：4-5）。平和を造り出すことは、自然に生じるものではなく、神の救いと和解に打たれ、その神の愛と赦しと聖性に倣う決断と格闘から生じる挑戦的なものなのです。

そのためシャロームは常に葛藤と格闘を経て、更新され続けるダイナミック（動的）なものなのです。プロセスの途上にあるものであって、固定化されたり、括られたりすることもない。み言葉に生かされる共同体は、このヴィジョンに突き動かされながら、完成に向けて不断の祈りと働きを促されるといえるでしょう。

「その時、荒れ野には公正が宿り、正義が果樹園に住む。正義が造り出すものは平和」（イザヤ 32：16）。命干上がるような荒れ野に、そして置かれた逆境で涙と汗を流して整えた果樹園に、恩寵によって正義と公正が定着することを通してこそ、平和は造り出される、と。

2) 平和を祈る

このシャロームを仰ぎ見る共同体は、“置かれた場所で祈る” 群れとされま

す。崩壊後の世界で、尊厳を剥ぎ取られ、故郷を喪失して意に反して異郷で生きることを余儀なくされた紀元前6世紀のバビロン捕囚の民に、エレミヤを通して神は語りかけたのです。なじみのない敵意とあざけりに晒される不本意極まりない異郷の地で、それでも家を建て、実を食べられる果樹を植え育て、家庭を築き、その場所に根を下ろし、腰を据えて「**私が、あなたがたを捕囚として送った町の平安（シャローム）を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安（シャローム）があつてこそ、あなたがたにも平安（シャローム）があるのだから**」と（エレミヤ29・7）。2023年10月6日以降、あるいは2022年2月24日以降（さらには2011年3月11日以降、2001年9月11日以降…）、一変してしまった世界のただ中を生きる、現代の“捕囚の民”である私たちにも、エレミヤ書は、浮き足立つことなく、今あるところのシャロームを求め、祈ることを促すのです。そのシャロームの中にこそ、神の賜るシャロームを見出すことになるから、と。私たちは、**今日の世界にあつてシャロームを祈る執りなしの務め**が与えられていることがわかります。礼拝を通してささげられる祈りは、実は、この2023年の世界で行き場を失い、故郷を追われ、祈ることのできない人たちの代わりに祈り、シャロームを造り出す営みでもあるのです。

3) 平和と聖化

私たちは、国籍を天に持つ地上の旅人として、今という時代にあつて「平和を造りだすもの」、「**地の塩、世の光**」とされている共同体です。眼前に迫る脅威や危機を冷静に見極め、究極的な「平和」への真摯な備えをなし、陶醉しない醒めた眼差しで今を責任的に生きる礎を聖書に持っています。

私は聖書が救い主として仰ぐイエス・キリストは柔和で謙遜で真に優しい方であつたと信じています。教会が託されておられるシャロームの完成への道ゆきは、この主イエスの後に従い、**栄光から栄光へと、「平和の君」であるこの主と同じかたちに変えられてゆく聖化の道程**（IIコリント3：18参照）と言えると思います。聖書に堅くたつて、互いに励ましあいながら、主の再び来たり給うを待ち望み、御前に立つ日に味わうシャロームの完成を遙かに望み見て喜

ぶ共同体に、キリストを幹とする枝枝に私たちは連なっていることを覚え、主に感謝いたします。

おわりに

旧約聖書に聴く“平和”というテーマでお話をしてまいりました。聖書が語る平和（「積極的平和」とも重なる）、シャロームの実現への道筋は、決して平坦ではなく、むしろ、勇ましい消極的平和の声の前にたじろぐ思いもあるかもしれません。ただ、旧約聖書の歴史、イエスキリストを信じる者たちの歴史を経て、内村鑑三や中村哲医師に脈々と流れる聖書の「シャローム」を望み見る共同体のヴィジョンに、しっかりと連なっていることを確信しています。そして、平和の君である主イエス・キリストと同じかたちに栄光から栄光へと造り変えられてゆく群れであることを覚えます。皆様と、これからも祈り、励ましあいつつ、平和を造り出す幸いを共に味わってまいりたいと願っています。